

現代アートとの対話を愉しむ場としても活用してきた。こうした公開活用を手がけてきた聴竹居倶楽部は、私以外はすべて地元大山崎町の、それも徒歩圏にお住まいの方々である。実は、歴史的建造物を保存公開活用していくうえで、この“地元第一主義”が一番重要だと、私の過去の苦い体験から考えたからだ。いくら著名な有識者や専門家が評価しようが、そうしたよそ者だけでは駄目で、地域愛（シビックプライド）を持ち、心の底から愛着を持ち続けている地元の方々が居ない限り、地域に根差した建物を活用し次世代に遺すことは難しい。

## ■ 個人から企業の所有への転換と国の重要文化財指定

「聴竹居」も個人所有のままでは相続税や固定資産税、建物維持管理費などの負担が大きく、世代を越えて長期に維持して行くことは極めて困難だ。そこで、平成28年（2016年）末に土地・建物の所有を個人・藤井家から企業・竹中工務店へと転換し、日常維持管理と公開活動を地域住民が中心の一般社団法人聴竹居倶楽部が行うという形を創り、そのふたつが両輪となって持続可能な保存活用を担っていくことになった。そして、竹中工務店は、取得後すぐさま文化財指定に向けて動き、平成29年（2017年）7月末に国の重要文化財指定【写真6】を受け、国の助言や補助を得ながら「聴竹居」を国民的財産として未来永劫遺していくことになった。

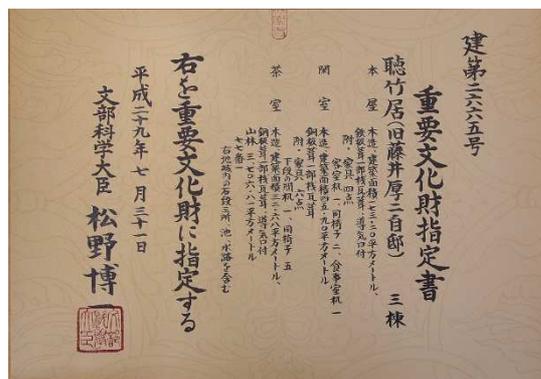


写真6 重要文化財指定書

重要文化財となった「聴竹居」の所有と運営の役割分担についてももう少し詳しく記すと、ハードな分野として土地・建物を所有し、随時、国庫補助等を含め予算化して、施設全体の維持管理、保存修理などを司るのが株式会社 竹中工務店、ソフトな分野として日常の維持管理と共に“愛でる会”や“講演会”などイベントの企画・実施、見学の受付業務や現地の取材・撮影対応、見学やゼミ利用時の藤井厚二や建物等の解説、藤井厚二アーカイブの整理・公開など、地元密着で細やかな運営を竹中工務店からの業務委託として行なっているのが一般社団法人 聴竹居倶楽部である。さらにソフトな分野で藤井家（藤井の次女の小西家）や地元の大山崎町に協力を仰ぐこともある。



写真7 「本屋」外観



写真8 「本屋」内観・居室から食事室を望む



写真9 「閑室」外観



写真10 「閑室」内観